フィールド（現場）からの風 ㉑

宮田守男

スポーツに着眼した地域づくりについて考えてみませんか

9月上旬、大町市で開催された第36回北信越総合男子ソフトボール大会・第11回北信越ハイシニアソフトボール大会に審判副主任として参加する。福井県・富山県・新潟県・石川県・長野県の各県の予選を勝ち抜いた強豪チームが参加する大会。決勝戦まで2日間の日程。多くのチームが大北地域に宿泊。遠方からの参加チームが集う大会は、運営は大変だが、地域への経済効果は大きい。

特に大町市は、グラウンド等の施設環境も良く、スポーツ愛好者も多い地域だ。自らもソフトボール競技などを好みスポーツに理解もある牛越徹市長、他の公用行事が無いと必ず開会式に出席し、歓迎のあいさつ。大町市のPRを印象深く伝える話術にいつも感心する。

長野県ソフトボール理事長を囲んだ交流会には、市長の牛越徹さん、大町市体育協会長の石原学さん、大町市ソフトボール協会長の島田剛志さんも参加、大会関係者と熱心に懇談する対応と、大町市の体育施設を積極的に貸し出す体制に、関係者の好感が高まる。

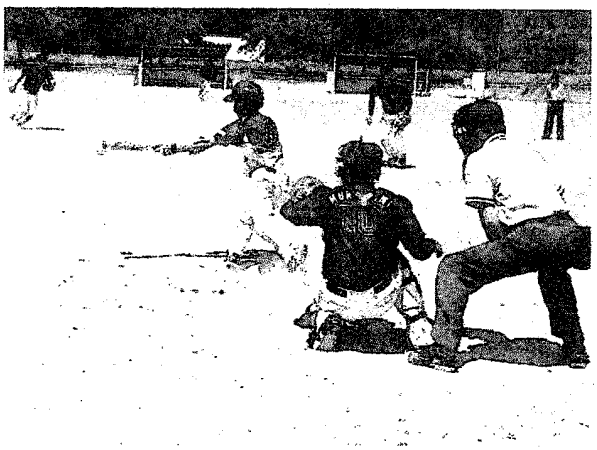
大町市出身の奥原希望選手が、リオデジャネイロ五輪のバドミントン女子シングルスで銅メダルを獲得。8月29日には、両親と一緒にオープンカーに乗り、JR信濃大町駅前から中央通りを約1・2キロにわたってパレード。主催者によると、沿道には市民の半分に相当する約1万2000人が駆けつけ歓声を上げた。

一市民の活躍に、地域がこれほど刺激を受けた経験は少ないはずだ。スポーツの魅力を再認識した今だからこそ、より身近にレベルの高いスポーツに接する環境を望みたい。

今回のソフトボールの大会は、レベルが高い。大会観戦者の熱い視線と共に、県内の審判員も県外チーム同士の試合での審判が初めての経験。経験の浅い審判員に感想を聞くと、「緊張したが貴重な体験だった」の言葉に続き「審判技術の未熟さ痛感、ルールブックを読み直さなければ」の言葉。身近な地域で、レベルが高い、大会の開催の必要性を改めて痛感する。

長野五輪で活躍した競技役員も、世界レベルでの競技役員として活躍する機会は、ほとんど無いのが現状だ。五輪招致の時、アジア地域でのスキー振興を担いたいと訴えた事を忘れてはいけない。大会運営には、多くの資金を必要とすることも事実だが、困難に打ち勝つ知恵がある取り組みを願っている。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）



レベルの高い大会を身近で開催する事で多くの人材が育つことを再認識する